

---

# モノクロ

並盛りライス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

モノクロ

### 【著者名】

N0439B

【あらすじ】  
君が描く絵には色がない。そして、君の世界は壊れそうなくらいに脆くて、あまりにも寒すぎる。

太陽に成れなかつた向日葵達の残骸が、白くフラッシュバックする光の渦を纏つてゐる。

歪んだ空がワツと泣き出してオレンジ色のペンキが流れ出す。黄色い傘がクルクル回る。都会の灰色、雲のグレー。

抑揚の無い声が紡ぎ出した言葉は、喧騒の中に消えてしまう。

「雨、止んだよ。」

誰かが言った。

「でも、病室には戻りたくないな。」

知らない天井、残酷な白さ。君の絵には色がない。

「なら、ずっと絵を描いていればいいよ。」

「そういう訳にはいかないよ。」

「どうして?」

「鉛筆は一本しかないんだ。消ゴムなんて半分しかない。」

滴がポタリと紙の上を滑ると、世界は滲んで別の世界を作り出す。

反射するオレンジ色の世界を、君は黒の鉛筆だけで表現しようとしていた。

「思ったよりも、空は遙くになつよ。」

君は、独り言のように呟いた。

できるだけ、邪魔にならないように離れて煙草を吸いながら。

君を後ろから見た。

痩せた背中、色白い肌、華奢な腕。

病室は闇ざされた檻の様な閉塞感に満ちていた。

「僕が死ぬまでは、絵を見ちゃダメだよ。」

「分かってる。何十年でも待ちますよ。」

一番深い黒から、一番明るい白まで。

君の病室は、病院という森の中でも特に深くにある。  
巨大なコンクリートの牢獄が君の体を蝕んでいく。

「寒い。」

「医者を呼ぶか?」

黙つて首を振つた君。

僕は、壁にかかつた時計を見た。

貧相なデジタル時計の無機質さが不気味だった。

「階段で行こうよ。」

「黙れだ。今日はエレベーターで降りよう。」

落ちていく感覚が怖いと言った君の顔。僕は今でも忘れていない。

ダイジョウブデスヨ

どんな時でも、そう言われてきた。笑顔の回数が増える度に、病院の奥へ奥へ追いやられる。

エレベータが開く。

神経質な顔をした、楣元先生が待っていた。

「どこに行つっていた。約束の時間を20分も過ぎてるぞ。」

「すみません、屋上に行つてました。思つたより遠かっただので…。」

「大丈夫なのか？」

汗を浮かべた君を見て先生が言つ。

「体調は凄く良いんですよ…先生。」

君が冗談を言つ時は、かなり無理をしている時だ。

君が本音を溢した時は、それよりも、さらにも悪い時だ。

すぐにベットに寝かされた君に一本の注射と点滴が施された。

「先生…。」

声にならない声で君は言つ。

「ダイジョウブなんて言わないでくださいね。」

相元先生は、四人目の担当医だ。君以外に、もう一人担当している。

担当医が替わるのは、決まって君の体調が悪化した時で、「ダイジョウブ」という言葉を吐いて居なくなる。

「もう駄目だ…と言えば安心できるのか?」

先生が言つ。

「良かつた…まだ生きてられそうな気がする。」

結局ソレは氣休めに過ぎず、でも君にはその氣休めが必要だった。

いい医者だと思つ。

沢山の救える患者の為に働く医者がいい医者なのだろうか。

何も出来ず、ただ氣休めを言つ事しかできない医者がいい医者なの

だらつか。

どちらも、いい医者なのだらつ。

「寒くなつてきましたね。」

エレベータの前で樋元先生が言つ。

「そうですね。今朝、今年初めて息が白くなつましたよ。」

「冬を…越せないかもしません。」

寒くなつてきましたね、と同じくひいての軽さで先生が言つ。

「あこつて言つたですか？」

僕は、少しトーンを低くして先生を試した。

「聞かれたら答えようと思ひます。彼はソレを望んでいる。」

「いい医者だ。と僕は思つた。」

エレベータが開く。

冬の寒空に星を浮かべて、遠い雪国を襯かしむ。  
丹生白色の世界が、白と黒の線を駆けていく。

君の背中はとても細くて、肌は雪のように白かった。  
病室の白壁にない自然の白は温かい色をしている。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0439b/>

---

モノクロ

2011年1月15日10時21分発行